第　40　号

# 県中教研
# 特別支援教育部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　土井真由美
題　　字　金山　泰仁　先生

## 校内支援体制の整備と校内研修の充実

指導主事　小櫻　昌子

研究主題「特別な支援を必要とする生徒の能力や可能性を伸ばし、自立と社会参加を推進する指導はどうあればよいか。－生徒一人一人の実態に応じ、興味・関心や意欲を高める学習過程の工夫－」の下、授業研究が行われました。

研究大会で授業を参観させていただいた特別支援学級では、生徒が、授業内容を理解し、学習活動に参加している実感や達成感をもちながら充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるという視点を大切にされていました。十分な実態把握と明確なねらい、自己選択や自己決定ができる学習過程の工夫､よさを認める言葉かけ等、大変勉強になりました。中でも、生徒の強みを生かす授業、生活とつながる授業となることが大切であると生徒の姿から実感しました。

今年度、中教研の部会協議に参加させていただいた中で、特別支援教育を推進するに当たり､｢校内の連携｣について考えさせられました。例えば、特別支援学級に在籍する生徒が、通常の学級に行って学ぶ際、支援の連携が図られているでしょうか｡通級による指導で行った自立活動の内容を、在籍学級で取り入れているでしょうか。各教科担任が全学級で個に応じた指導・支援を行えているでしょうか。また、在籍学級担任と支援員とが打合せをする時間は確保されているでしょうか。どの学校でも悩み、工夫しながら取り組まれていることと思います。今、通常の学級担任等との情報共有や連携のための時間確保が課題となっています。全教職員の理解と協力の下で、校内支援体制の充実を図ることが益々必要です。共生社会の形成に向けて、私たちができることを考えていかなければならないと思いました。

今後も特別支援教育に携わる先生方が中心となり、校内支援体制の整備や校内研修の充実にご尽力いただけますよう、よろしくお願いします。

（東部教育事務所）

## 一人一人の実態に応じた学習過程の工夫とは

部長　土井真由美

昨年度に引き続き、「生徒一人一人の実態に応じる」ことに焦点を当て研究を進めてきました。

第68回研究大会では、東西地区で工夫を凝らした実践が提案され、多くの成果を得ることができました。まずは、授業者を始め、会場校、運営に携わってくださった全ての方々のご尽力に深く感謝申し上げます。

東部地区では、授業を事前に録画し授業者が動画を見ながら解説をする形式で発表が行われました。自己決定の場を適宜つくり、褒める場面を多く取り入れながら学習を進めたことで、生徒の自己有用感が高まり、最後まで主体的に課題をやり抜く姿が見られました。

西部地区では、オンライン形式で知障級、自・情級の２つの授業が行われました。コミュニケーションを可視化できるツールとして気持ちカードやボールを用いて適切な会話に気付かせたり、日常生活に沿ったロールプレイを通して自己表現に自信をもたせたりして、自分も相手も楽しい会話について学びを深める姿が見られました。

また、授業力向上アドバイザーとして富山大学教授であり医師でもある宮一志先生をお迎えし、発達障害の現状や診断の考え方を交えながらご講話をいただきました。医療と学校との連携や子供のもっている力を最大限に引き出すことの大切さについて貴重なご示唆をいただきました。

近年、通常級における特別な支援を要する生徒が増えています。今後は、この部会の知見を、部会以外の教員とも共有していくことが生徒の実態に応じた指導を実現できる一つのカギとなっていくのではないかと思います。

（富・城山中）

# 第68回 富山県中学校教育課程研究大会

**東部地区（富山市立上滝中学校）　令和6年10月16日（水）**

研究授業は、知的障害特別支援学級（３年生女子１名）で、金井恭子教諭による数学科の授業「図形の形と大きさ」が行われた。授業内容は、しきつめ模様の中に合同な図形や模様の規則性を見付けるものであった。参加者は、事前に撮影された授業の様子を協議会場で視聴した。

授業では、最初に規則性のある図形が組み合わされたデザインを見て図形の名称を答えたり、生徒の好きなキャラクターのパズルに挑戦をしたりして、生徒に図形に興味をもたせてから、本時の課題「ひし形をしきつめて、きれいな模様をつくろう」に取り組んだ。最初に、正六角形の枠に12個（４色ずつ３枚）のひし形をしきつめた後、合同の決まりを確認しながら、しきつめた形の中から合同な図形を見付け、それらの合同な図形がどのように組み合わされているのか、その特徴を発表した。その後、同じ正六角形がたくさん描かれているプリントで、図形の組合せを意識しながら、生徒の好きな色４色で色塗りをする活動を行った。生徒は一つ一つの模様の色塗りを丁寧に行いながら、金井教諭の支援を基に、本時の学習の目標である模様の規則性を見付けようとする姿が見られた。

部会協議①では、４～５人のグループで授業の様子を視聴して気付いたことや研究主題との関連について、現任校での取組を振り返りながら意見交換や情報共有を行った。協議時間が短かったこともあり、グループで出た意見を全体で共有することができなかったが、それぞれのグループ内では有意義な意見交換や情報共有が行われていた。

小櫻昌子指導主事（東部教育事務所）からは以下の助言をいただいた。

- 生徒の実態把握を行うことで、生徒を多面的に捉えて能力や可能性を伸ばすための工夫ができ、生徒が主体的に課題に取り組む姿が見られた。
- 空間認識の弱さをもつ生徒は図形の学習は苦手分野であるが、好きなキャラクターを活用したパズルを取り入れることで学習に興味をもたせてから、本時の課題に取り組ませるという段階を踏んだ場の設定・工夫がなされていた。
- 生徒の実態に合わせて、分かりやすく取り組みやすい学習課題、自己選択や自己決定ができる学習過程を工夫することが必要である。
- 学習の振り返りで、生徒に成就感や達成感をもたせるために、生徒を認め励ますことが大切である。生徒が成就感や達成感を味わうことができる評価は、生徒の学ぶ意欲やできる喜び、学級で学ぶ安心感につながる。
- 学習のねらいに応じて、生徒の学びを助ける手立てとしてICT機器の活用も検討することが望まれる。

部会協議②では、富山大学教育学部の教授であり富山大学附属病院小児発達神経科の医師でもある授業力向上アドバイザーの宮一志先生から「発達障害生徒の理解と医療との連携」というテーマでご講演をいただいた。医師からの視点で発達障害の生徒をどのように捉え、支援していくのかということを知ることができ、参考になった。

西川　泰代（滑・早月中）

# 第68回 富山県中学校教育課程研究大会

**西部地区（南砺市立福光中学校）　令和6年10月16日（水）**

研究授業では、知的障害特別支援学級（１年生１名）で、萩原至道教諭による自立活動の研究授業、自閉症･情緒障害特別支援学級（１年生３名、２年生１名）で、桑﨑美緒教諭による自立活動の研究授業が行われた。授業は、各教室にカメラを設置し、参加者は別室で授業の様子を視聴した。

**〈知的障害特別支援学級〉**

**題材名　言葉のキャッチボールをしよう**

キャッチボールトークを通して、言葉の伝え方で相手に与える印象が変わることに気付き、自分も相手も楽しい会話とはどのようなものか理解することをねらいとした授業であったが、開始時からカメラがあることで生徒が緊張してしまい、生徒と会話することができなかった。そこで、萩原教諭は生徒の様子から授業の途中で目標を「自分の気持ちを伝える」に変更し、緊張をほぐそうと声を掛け、表情カード等を使って生徒の思いを引き出そうとした。

協議会では、生徒の変容を生み出すための効果的な手立てや、生徒１名で行う自立活動の難しさ等が挙げられた。

江田希指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・生徒の状況に合わせて本時の目標を変えたことで、生徒は気持ちを切り替えることができた。
・感情を視覚化できる表情カードが効果的であった。今後も授業や普段の活動場面で活用したい。
・教師が「恥ずかしいのかな」と言えば言うほど生徒が緊張していく様子が見られた。緊張することを肯定的に捉え意識しすぎないようにさせたり、緊張する場面を意図的に設定して話せるように指導を行ったりしていくとよい。

**〈自閉症・情緒障害特別支援学級〉**

**題材名　互いの気持ちを想像しよう**

ロールプレイを通して、互いの気持ちを考えることを課題として授業が行われた。桑﨑教諭によるロールプレイや写真等を使って、生徒が気持ちについて考え、発言できるよう教材の工夫がなされていた。協議会では、生徒にとって必要感のある課題設定であったことや教師の細やかな声掛けがよかったとの意見が挙げられた。また、ロールプレイを教師だけでなく生徒も演じたり、生徒にとってより身近な場面を設定したりすればよかったのではないかとの意見も挙げられた。

大道正敬指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・あらかじめ生徒のつまずきを予想して、支援の方法を具体的に考えていた。毎時間の自立活動の積み重ねが生かされていた。
・人の気持ちを考えることが苦手な生徒にとって難しい課題だったが、生徒の意欲を高めるための支援がされていた。
・自分の気持ちを言語化することが難しい生徒に対して、気持ちを選択できるようにするという手立ては有効である。
・実演や写真の提示等、視覚的支援がなされていた。動画を使用することで、表情を繰り返し提示し、気持ちを考えさせることができる。

岡本　奈々（氷・北部中）

# 発達障害生徒の理解と医療の連携
## （第68回東部地区大会での講演概要）

富山大学教育学部教授
富山大学附属病院小児発達神経科医師　宮　　一志

### 1　障害をもつ生徒の実態について

近年、発達障害や知的障害をもつ生徒数が増加しており、医療現場に受診、相談に来る生徒も多い現状である。また、受診に来る生徒の年齢によって発達障害の種類に変化が見られる。小学校に入学する以前の児童では、知的障害やASDと診断される児童の割合が多くを占めている。一方で、小中学校に入学後の生徒では、学校生活での落ち着かなさから受診に来る生徒が多く、ADHDと診断される生徒の割合が高い。中学校進学後に初めて受診する生徒では「二次障害」をもつ生徒も多くなっている。

### 2　二次障害について

二次障害とは、児童生徒がもっている特性と関連したストレスを背景として生じる、情緒・行動・精神面での問題である。特性に合った支援やサポートが受けられない、自分に合わない環境の中で過ごさなければならないなど、生活の中での強いストレスから二次障害が引き起こされることがある。注意や指導が繰り返されたり、周りの不適切な関わりがあったりすることで、自己肯定感が低下し、引きこもりや不登校、暴力や暴言といった問題行動が生じる。

また、二次障害は児童生徒がこれまでに不快な体験を繰り返した結果からなることが多い。改善は非常に困難であり、支援者には生徒の年齢と同程度の時間をかけて対応していくことが重要である。

### 3　障害をもつ生徒の支援について

発達障害のある児童生徒は、通常の学校生活において困難や挑戦を経験することが多い。行動や特性が理解されずに過ごすことで、二次障害を悪化させてしまう可能性がある。そこで、教育現場の適切な環境を整えることが重要である。教員と家庭、医療現場が連携し、生徒の学校や家庭での様子を連絡することで発達障害への理解が深まり、より適切な支援を行うことができる。

同様に、二次障害を引き起こさないような未然防止の働きかけが重要である。小学校教員と中学校教員が連携して情報交換を行い、包括的な支援を行うことが生徒の行動や心の安定につながる。

### 4　医療現場と学校の連携について

医療現場では、児童生徒の障害が生まれつきのものか、どの時点で起こったものなのか総合的に判断し、「環境調整」と「心理社会的治療」が行われる。環境面では、生徒が充実した学校生活を行うことができるよう情報提供を行い、生徒の特性に応じた環境づくりが求められる。心理社会的治療では、学校生活や社会で安定した生活を行うために重要な資質を身に付けることが大切である。

環境調整、心理社会的治療でも対応が困難である場合は、薬物治療が行われる。ただし、薬物治療によって特性を和らげることはできるが、効果は限定的であることに注意しなければならない。

### 5　まとめ

医療現場と学校との連携では、双方のできることやできないことを理解したうえで、本人の状況を家庭、学校、医療で共有し役割を果たすことが良好な連携につながる。児童生徒がもっている力を最大限に引き出すために学校の強みを生かしてほしい。

舟本　　祐（下・朝日中）